

第6回 小千谷市立小中学校の在り方検討委員会 会議録

日 時：令和7年7月17日（木） 午前9：30～11：40

場 所：南中学校 特別活動室

出席者：15人

遠藤英和委員 船岡芳英委員 関昌子委員 鈴木進五委員 山崎勝之委員
菊地亜弥子委員 森田雅弘委員 大西洋子委員 渡邊類委員 大場亜梨沙委員
森本恵理子委員 渡邊久美子委員 佐藤正機委員 木原宏幸委員 佐藤正敏委員

事務局：5人

小林管理指導主事 久保管理指導主事 小田原学校教育係長 岩渕教育総務係長 和田主任

会議概要：

1. 開会

15人の委員からの出席をもって、「小千谷市立小中学校の在り方検討委員会設置要綱」第6条に基づき、会議の成立を報告。

2. 学校視察

南中学校 今井教頭より南中学校を案内いただき、子どもたちの様子等を視察。

3. 委員長挨拶

4. 議事

1. 第5回検討委員会の振り返り
2. 南中学校について（阿部校長より小規模校での教育等について説明）
3. 小千谷市における小中学校の適正な学校規模について
小千谷市における小中学校の適正な通学距離及び通学時間について
4. 今後のスケジュールについて

5. その他

6. 閉会

発 言 者	内 容
遠藤委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の質の保証を第一に目指した具体的な構想案を、個人的な想いでもよいので教えてほしい。
船岡委員	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス替えができ、多くの人と触れ合えることを考えると、1学年につき3学級が理想的。つまりいた際に、クラス替えができないと困る。 ・適応できなかった子どもが選択して入ることができるような、受け皿としての学校も必要となるのではないか。
関昌子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校については、各学校のよさや特色を残し、住んでいる地域を大事にできる子どもたちを残していくためにも、現在の学校数は維持したい。 ・令和8年4月に開校する学びの多様化学校にどれくらいのニーズがあるのかということも、今後の検討材料としたい。
鈴木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの人数が減少していく中で、現在の学校数を維持するのは難しいのではないか。 ・将来的には、小中学校ともに1校ずつにせざるを得ないのではないか。
小林管理指導主事	<p>(学びの多様化学校の現状について説明)</p>
大西委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい学校のデメリットである子どもたちの選択肢が少なくなるというのは、将来の選択肢を狭めることになる。 ・1学年につき3～4学級の規模が理想。
渡邊類委員	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の質を保証するという事を考えると、クラス替えによるリセットができ、新しいことに挑戦できる環境が必要になる。 ・幼い頃からずっと少人数で過ごすことで、人間関係が固定化され、「得意な子・不得意な子」というレッテルを貼られるということは避けたい。
大場委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の統廃合は避けては通れないと思うが、その影響を受ける子どもたちがどう考えているかを大切にしていきたい。 ・子どもたちの選択肢を狭めないようにしてあげることが大切である。
森本委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校は3学級、中学校4学級程度が望ましいと考えるが、地域文化の継承や受け皿となる学校の必要性というものも踏まえると、小中学校を1校にすることがよいというわけではない。 ・子どもや保護者、地域といった多様な視点に立って検討していくことが必要である。
渡邊久美子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の質の保証を第一に考えると、中学校は1校がよいと考えるが、学びの多様化学校とは別で、子どもが自分で選択して入ることができる特色ある学校があるとよいのではないか。

渡邊久美子委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小規模の小学校については、とても魅力的ではあるが、今後の児童数の減少を考えると、その環境も維持できなくなると考える。早い段階で統合してもよいのではないか。 ・地域の伝統については、小千谷市はこれまで何度も学校の統廃合を経験している。これまでと違うやり方になるかもしれないが、文化の継承はできると考える。
佐藤正敏委員	<ul style="list-style-type: none"> ・片貝町内で今後の児童生徒数推移や検討委員会を進めていることについて、情報提供を行った。 ・小中一貫校も選択肢の1つとして検討していきたい。
木原委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小千谷市の学校教育を考える上で、小千谷市の学校に通わせたいと思う環境を考えることが必要。 ・教育の質の向上には、教員の確保が必要であり、教員になりたいと思える環境、待遇面も改善する必要があるのではないか。求人倍数が3倍くらいでないと良い人材の選定はできないという話もある。 ・理想論を言うと、適正な学級数ではなく、1学級あたりの適正な児童生徒数を検討していくことが必要ではないか。20人程度で1学級を編制できればベターではないか。 ・スクールバスでの通学については、冬期間の通学などでの時間的な変動も含めると、できるだけ近くで通える範囲にした方がよいと考える。
佐藤正機委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学級数はそこまで気にしなくてもよい。 ・子どもたちは机に向かっているよりも、いろいろなことを体験することが大切である。
森田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・各委員の意見から、中学校は1学年3～4学級程度の学校を1校と、2学級程度の小中一貫校が想定できるのではないか。 ・小学校の方が早く人数が減少していく。複式学級を否定するわけではないが、小学校にある程度の方向性が必要となってくる。
菊地委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小千谷市は教員確保困難地域であり、若い職員が多く配置されているため、質の確保は重要な課題である。小中学校ともに1学年につき2学級あれば、教員にとってもよい経験を積むことができ、成長できる。 ・地域とのつながりという面では、ふるさとを大切にできる教育を、どの学校でもきちんと実践できるよう、一層工夫していく必要がある。
山崎副委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・教員目線で考えると、1学級20人程度の規模がちょうどよい。 ・学校と小さい地域との連携は大事にしていく必要がある。

遠藤委員長	<ul style="list-style-type: none">・次回は、これまでの検討委員会を整理した資料をもとに、答申について検討していく。 <p>(第7回小千谷市立小中学校の在り方検討委員会について)</p> <ul style="list-style-type: none">・第7回検討委員会は、8月末(日程調整後、後日決定)に、あすえ～るにて開催することを確認。
-------	---

上記委員会の次第を記載し、その相違ないことを証明するため、ここに署名する。

令和7年8月26日

小千谷市立小中学校の在り方検討委員会

委員長